



令和6年度 かがわ子育てステーション パワーアップ事業 開催報告書

核家族化の進行や地域のつながりの希薄化などにより、気軽に相談できる相手が身近にいないなど子育てに対する悩みを一人で抱え込まないよう、不安や孤立感などを和らげることを通じて、保護者が自己肯定感を持ちながら子どもと向き合える環境を社会全体で整えることが求められています。そこで、子育て家庭や妊産婦が気軽に立ち寄ることができ、子育てに関する相談支援や情報の提供が受けられ、子育て家庭同士の交流ができる子育ての拠点「かがわ子育てステーション」について、ステーションの支援力向上やネットワーク構築を図るための研修会を実施しました。

- | | | |
|-----------------|---|----|
| 第1回 キックオフ研修会 | 子育て家庭のより所になる 【かがわ子育てステーション】を目指して | 01 |
| 第2回 | 人口の少ない自治体での子育て支援の在り方について | 02 |
| 第3回 | 子育てステーションに集う親子の個別のニーズや 求められる相談対応 | 03 |
| 第4回 | 子育て拠点到求められるこれからの支援について ～子ども・若者の声を聞いてみよう～ | 04 |
| 第5回 | 人口の少ない自治体での子育て支援の在り方について | 05 |



01

(キックオフ研修会)

R6.6.17 (月)

10:00~11:50

@県庁ホール

参加者54名

子育て家庭のより所になる 【かがわ子育てステーション】を目指して

講師 川田学さん (北海道大学大学院教育学研究院附属
子ども発達臨床研究センター 准教授)

かがわ子育てステーションパワーアップ事業のキックオフ研修会と位置づけられ、冒頭では池田豊人知事による挨拶があり、県民の子育てに対する不安を少しでも和らげ、子育て環境の流れを変えるためにも様々な面からアプローチしていくことなど、子育て家庭に向ける知事の想いが語られました。

ステーションは“気軽に”行くことができる場所であることが大切で、子育て支援が目的の場所になるとそこには行きづらさという壁が生まれてしまいます。気軽に交流できる場所に会話がついてきて、そこから子育て相談ができるということが大切ですが、この“気軽に”というところの重要性に気づくと同時に、難しさを語る声も参加者からあがりました。

また、子育てに向き合うほど、仕事との両立に対するジレンマを抱える男性が増えていくという現状もある中、ステーションに求められるのは、母親に対する相談援助に限らず父親への関わり方も重視していくことであり、既に頑張っている姿勢への寄り添いやそこに抱く思いに対して共感することというお話もありました。

他国の子育て拠点や保育施設の環境が紹介され、日本との違いや子どもも大人も心地いいと思える場所のイメージがより具体的になり、参加者にとってそれぞれの拠点にかえり、また来たいと思言える場所づくりとして取り組みたいことの気づきになったようです。





02 人口の少ない自治体での子育て支援の在り方について

R6.8.7 (水) 講師 渡邊 顕一郎さん (日本福祉大学子ども発達学部
子ども発達学科 教授)

9:30~12:30 ファシリテーター 金山 美和子さん
(長野県立大学健康発達学部こども学科教授)

@土庄町立中央
公民館

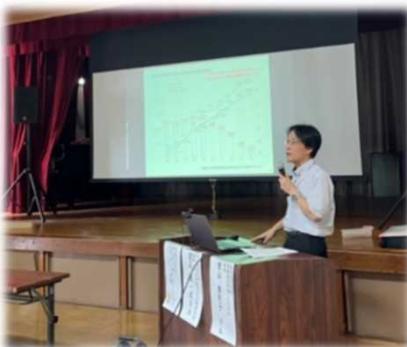
参加者15名

経済状況と貧困、障害児や虐待児をめぐる状況については、診断を受けた子どもの親の7割ほどが、3歳になるまでに子どもに対して気になることがあったという結果から、気になっているという段階から相談できる場所、手を差し伸べる存在であることが支援拠点として重要であるというお話がありました。

児童虐待の予防的視点から見た子育て支援について、地域における子育て支援はあらゆる家庭を対象に、第1次予防として発生予防の役割があり、相談したことに寄り添い、解決につなげてもらえる存在が身近にいることは大きな発生予防につながるということが伝えられました。

支援拠点の利用を促すことに着目した話では、たとえ出生数が減少しても、開所日数を増やす、利用時間の延長、支援の内容の見直しと充実を図ることなど、支援側の取り組みによって利用増加を促進させる可能性があり、出生数と利用数は必ずしも比例しないのだということが受講者の心に響いたようでした。

講義後の交流とワークショップでは、課題として開所日数を増やしたり、利用時間を延長したりするにあたり、人員確保が課題になっていることが参加者から多く聞かれる一方、拠点同士で交流しそれぞれの取り組みを知ったり、同じ課題に向き合ったりしながら、今自分たちにできることに目を向けるとともに、少人数でも来てくれた人に対する支援の質を向上させていくことで人が人を呼ぶ、その力を信じて諦めず、現場に向き合うことに意味があると、一人一人が感じられる研修となったようです。





03 子育てステーションに集う親子の個別のニーズや求められる相談対応

R6.9.13 (金)

講師 伊藤 篤さん (甲南女大学 教授)

13:30~16:30

ファシリテーター 中條 美奈子さん

(認定NPO 法人マミーズ・ネット 理事長)

@丸亀市生涯
学習センター

参加者28名

ステーションの相談対応に必要な力量について、ステーションで受ける相談の内容をカテゴリ別に分類し、相談記録を残し蓄積させていくことで悩みの傾向を知ることにより、利用者が抱えやすい心配事や悩みを理解し、対応していくことが大切だと伝えられました。

また、相談に対応する構えや技能について求められることは、最初からジャッジしない姿勢、否定せずには受け入れる姿勢をもったうえで、相談者が感じていること、考えていることの背景を見ていくということでした。類似の相談内容であっても、個々の悩みは同じではなく、「個別化」して捉え、一人ひとりの課題に寄り添い、その人が自己決定していくことで自信につながるように導いていくことが必要だというお話がありました。

ワークショップでは、個人ワークをした後、グループワークで意見交換を行い、同じ事例を見ても、人によって捉え方が違うことが実感できたようで、捉え方には正解がなく、様々な見方があることで様々な可能性に気づける良さがあるのだと、捉え方の違いが肯定的に説明されました。受講者は自分では気付かなかった「発見」ができ、視野が広がったと感じられたようです。

最後に、+1アクションとしてすぐに実行できる目標を具体的に設定し、グループ内で宣言したところ、所属する施設の情報や課題を前向きに共有し合うとともに、ステーションを知ってもらい使ってもらえるよう、親子にとって「安心できる居場所」としての広報に力を入れることが共通の目標となりました。





04

子育て拠点に求められるこれからの支援について ～子ども・若者の声を聞いてみよう～

R7.1.10 (金)

講師 荒井 和樹さん (全国こども福祉センター理事長、
中京学院大学 専任講師)

14:00～17:00

加藤 早耶香さん (全国こども福祉センター
つながる通信編集長)

@サンポート

ホール高松

参加者41名

冒頭では7つの不自由な条件のある生活が提示され、大人の視点でそれぞれ考えたものの、もし、「子どもだから」ということが理由になるのであれば、なぜ子どもは不自由な状況が許されるのかと考えてみてほしい、そうすることで、本当の意味で子どもの権利を守る、尊重するために、こういった考え方の根底を疑うことがその一歩になるというお話がありました。

児童相談所などの相談窓口は本当に支援を必要としている人にとってはハードルが高いことから、「全国こども福祉センター」は、来るのを待つのではなく、街に出向き一緒に活動することで、支援するもの、支援されるものという壁はなく仲間として迎え入れられ、人と人とのつながりから、信頼が生まれ、必要な時に助けを求められる関係性の構築を大切にしているというお話がありました。これはステーションでも通ずる重要な視点であり、心構えとして大切にしたいと感じた受講者も多かったようです。

また、交流として「ワードウルフ」というゲームをしました。この時間までグループ内での自己紹介は一度も行われることなく進められ、受講者はお互いのことをほとんど知らなかったものの、ゲームを通して自然と交流が進み、受講者からは、「自己紹介がないままの交流では心を開くのが難しいのではないかと感じていたが、打ち解けられることを身をもって感じる事ができた」という声が聞かれました。言語でのコミュニケーションが難しくても交流し、関係を築いていくことができるのだという体験が支援者としてのひとつの引き出しになったようです。

支援者は支援をすることを目的とするのではなく、一緒にいて話をしたり聞いたりするなかで何を求められているかに目を向けて、それを可能にする活動を考えていくのだということが伝えられ、「支援」という概念をこれまでと大きく変化させ、関わりを見直したいと新たな視点をもつ機会となったようです。



05 人口の少ない自治体での子育て支援の在り方について

R7.3.5 (水) 講師 奥山 千鶴子さん (認定NPO 法人びーのびーの理事長、
NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会理事長)
13:30~16:30

@三豊市市民
交流センター
参加者31名

こども家庭庁がスタートし、「こどもまんなか社会」の実現が目指される中、子どもたちのウェルビーイングを全世代で支えるための「はじめの100 カ月の育ちビジョン」が共有されました。このビジョンでは子どもが100 カ月になるまでの時期を人生を幸せな状態で過ごすために最も大切な時期としている一方、このビジョンを知っている人は受講者の中でも数名程度であり、支援者間でも認知度が低いことが感じられ、支援者をはじめとして認識を広めていくことが必要だというお話がありました。

子どものウェルビーイングにつながる心理的健康のひとつである「安心」、これが土台にあることで子どもは外の世界に向かって挑戦したいという気持ちが芽生え、その土台となる「安心」について、親以外に愛着関係をもてる人が地域にいることが大事であることが伝えられ、その役割をステーションのスタッフも含めて担っていきたいという気持ちが高まったようです。

グループワークによる事例検討では、同じ事例を【支援者として子どもにできること】【支援者として保護者にできること】という二つの側面で捉え、意見交換をしたところ、二つの側面を通して、支援者は保護者の目線になって考えることは多いものの、それだけに限らず、子どもにとってどのような場所でありたいのかという視点をもつことが子どものウェルビーイングを支えていく上でも、重要なのだと実感できたようです。交流を通して、子育て家庭を支える仲間として、今後もつながりを持ち続けることで、研修外でも助け合いの輪が広がっていくことが期待されます。

